

科学研究費助成事業（基盤研究（S））中間評価

課題番号	19H05589	研究期間	令和元(2019)年度 ～令和5(2023)年度
研究課題名	OS言語からみた「言語の語順」と「思考の順序」に関するフィールド認知脳科学的研究	研究代表者 (所属・職) (令和3年3月現在)	小泉 政利 (東北大学・文学研究科・教授)

【令和3(2021)年度 中間評価結果】

評価	評価基準	
	A+	想定を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
○	A	順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
	A-	概ね順調に研究が進展しており、一定の成果が見込まれるが、一部に遅れ等が認められるため、今後努力が必要である
	B	研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
	C	研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である
<p>(研究の概要)</p> <p>言語心理学や言語脳科学では、従来英語や日本語など、主語(S)が目的語(O)に先行するSO語順に基づいて研究が行われ、人間の言語能力に関する理論が提案されてきた。</p> <p>本研究は、目的語が主語に先行するOS語順や、語順と格表示について多様性を持つ言語について脳内言語処理及び神経基盤の研究を行い、日本語などのSO言語の研究の分析結果と比較する。これによって語順の選好において個別言語の特性を要因とするものと、人間の普遍的認知特性を要因とするものとの弁別を行い、従来の理論を是正して、脳内言語処理メカニズムに関する一般性の高いモデルを構築しようとするものである。</p>		
<p>(意見等)</p> <p>本研究は、人間の言語能力に関する研究における従来の分析対象言語の偏りと、それに起因する理論構築面の偏りを是正するために、言語の多様性に注目している。</p> <p>基本語順がOS言語であるカクチケル語や、OS、SOの両語順と動作主態・着点態の対立を持つタロコ語、「能格・絶対格」型の対立を持つトンガ語について、これまで蓄積されてきたデータを基に研究を行った分析結果と日本語の分析結果との比較を行うことで成果を上げつつある。</p> <p>新型コロナウイルス感染症の影響により、海外でのフィールドワークと実験の計画を練り直す一方で、日本語の実験を先行させ、談話内の文の理解・産出負荷に関する実験などにより、言語処理と文脈的要因の相互作用についての成果を上げていると評価できる。</p>		